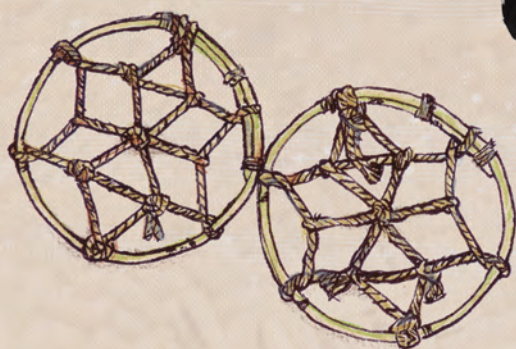


奥会津7町村文化施設間連携企画展

奥会津の冬

おくあいづのふゆ





冬の檜枝岐村 (1965年頃)

題字 本多見行

企画展開催にあたって

只見川電源流域振興協議会では、「自然のなかにくらすいとなみ、100年先のみらいへ」を基本理念に掲げ、豊かな自然に育まれた悠久の歴史を次世代へ繋いでいくために、奥会津が一体となって誇りを醸成していきます。

本取組みは、地域内を移動する際に垣間見える景色や、そこに暮らす人々の自然な姿を通じて、奥会津地域のありのままの地域性や文化に触れてもらうことが狙いです。また、各町村にある既存のミュージアム（博物館、美術館、資料館等）を地域内外の人々が周遊することにより、地域の文化的な価値の理解と、文化を通じた交流人口の拡大を目指すものです。

昨年度、奥会津地域の7町村（檜枝岐村、只見町、南会津町、柳津町、三島町、金山町、昭和村）が連携する企画としては初の試みとして、企画展「奥会津の縄文」を開催し、大変多くの来場者がお越しくださいました。

今年度につきましても、7町村共通の企画展として「奥会津の冬」を開催する運びとなり、また、奥会津の冬の生活について詳細に記載した報告書を刊行することといたしました。

本書は、奥会津の有識者らで構成した編集委員会が中心となり、豪雪地帯特有の大雪がもたらす環境を記録

したものはもちろんのこと、冬を越すための知恵として受け継がれた伝統的製法を駆使した保存食文化や、五穀豊穡や無病息災を祈願した年中行事など、奥会津ならではの独自の文化を伝えており、多くの関係者に協力を得ながら完成した貴重な報告書となっております。

奥会津地域は、広大なブナの原生林など豊富な森林資源、急峻な山岳や河岸段丘が成す優美な景観を有しており、古からの伝統文化や工芸を継承している地域です。また、日本有数の豪雪地帯としても知られ、豪雪と雪崩によって山腹斜面が浸食され形成された地形「雪食地形」^{せつしょくちけい}は世界でも珍しく、そのような多雪環境がもたらす厳しくも豊かな自然と、そこに生きる人々や文化からなる「冬のいとなみ」は、多雪地域ならではの豊かさと言えます。

本企画展を通じて、奥会津でも色濃く残る風習や暮らし、生業といった営みを多くの方に伝えていく機会にしたいと考えています。この機会に各会場を巡り、雪がもたらす奥会津の豊かさを肌で感じていただければ幸いです。

最後に、本展の開催および本書の刊行にあたり、ご協力いただきました各関係機関、ご支援、ご尽力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

令和六年（2024）七月

只見川電源流域振興協議会

会長 押部源二郎

“奥会津の冬” 開催にあたり

夏という季節に、奥会津の冬をテーマとした特別展を開催してみたい。そんな声が上がったとき、その発想の意外さに驚かされながら、それは面白いかもしれないね、というワクワクするような興奮を覚えたことを記憶している。それがこうして実現することになった。

奥会津の七つの村や町が連携して、それぞれに文化施設を選び、それぞれの想いと工夫を凝らしてさきやかな展示を組み立てる。そして、それをやわらかく繋いで大きな特別展としてデザインしてゆく。奥会津振興センターが奥会津ミュージアム事業の一環として行なっている、奥会津の文化施設が連携して、奥会津のいまを生きる人々の歴史・文化的なアイデンティティを織り上げてゆくプロジェクトである。一昨年は「東北と写真」、昨年は「奥会津の縄文文化」をテーマに選んで、特別展を開催した。思いがけず、奥会津のみならず、県外からたくさんの人々に参加していただくことができた。とりわけ、昨年は一万五千人を超える方々の訪れがあった。奥会津の村や町を巡り歩き、その山深い風土のなかに培われてきた景観の豊かさに眼を奪われながら、ささやかな展示室にたどり着く、そんな、それぞれの小さな旅が演じられたのではないか、と思う。

これからのミュージアムは、大地にいだかれ、大地と対話を重ねながら、大地を肥やしとして育まれる、文化創造の現場となっていくってほしい。それがひそかな、わたしたちの思いである。(都人よ 来てわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ)、この宮沢賢治さんの言葉に、わたしたちは日々励まされて

いる。

奥会津の地に埋もれてきた縄文の土器や土偶などに、眼を凝らしながら、この縄文人たちはいったい、どのような暮らしと生業を営んでいたのだろうか、と考えることはなかったか。縄文の出土遺物のかたわらには、そっと、奥会津の人々の暮らしを支えてきた民具が展示されていたはずだ。そこには、おそらく一万年の文化的な連続性というものが存在して、縄文人の残した遺物は現代の民具へと真っすぐに繋がっている。これこそがアイデンティティの核となるものだ。奥会津の地に、一万年の手技による物作りの歴史が受け継がれてきたことを寿ぎたいと、心より思う。そして、そうした物作りが実は、冬という季節を選んで行なわれていたことに思いを馳せてみたい。それはいまでも昔も変わらず、そこにある。

だから、奥会津の冬が大切なテーマとして浮かびあがる。一年の半ば以上を分厚い雪に埋もれて暮らす雪国では、夏と冬にはまったく異なった暮らしの風景が見いだされる。夏は見えるが、冬は見えない。ことに、旅人たちの前に雪国の冬は秘密のヴェールに覆われてきたのかもしれない。その名を知られた、越後塩沢の地で、鈴木牧之という人によって書かれた『北越雪譜』という書物は、それゆえに江戸時代の雪国をめぐる百科全書として、江戸の町で出版され、当時のベストセラーになったのである。かつて、鉄道と車による交通網が整えられる以前には、雪国の冬を旅することは不可能だった。雪国の冬は近代が産み落とした旅のテーマであり、ひそかな旅の醍醐味となったのである。

いまは、見えなかった雪国の冬と出会うことは、それほどむずかしくはない。奥会津の冬はとても近くあった。むろん、いまでも縄文時代と変わらぬ大雪が降るけれども、除雪はきちんと行なわれ、人々は車で移動し、当たり前前の日常生活を送っている。冬の暮らしの風景は大きく変化したけれども、冬が夏とはまるで異なる「籠もり」の季節として、物作りや学びのための時間であることは変わらない。小正月や春を迎える頃には、冬の祭りや年中行事がいまも営まれている。(都人よ 来てつわれらに交れ)という賢治さんの声が聞こえる。

この特別展のために編まれた図録は、奥会津に暮らす人々の手で『奥会津雪譜』を作りたいという野心の

産物であることを、あえて隠す必要もないだろう。それはまだ先駆けの書ではあるが、やがてこの特別展をきっかけにして、本格的な『奥会津雪譜』が生まれてくるにちがいない。それから、この特別展について初めて提案してくれたのは、昭和村のからむし工芸博物館の学芸員であった松尾悠亮さんである。いま、松尾さんは北海道の郷里の博物館に移られたが、感謝の思いをお伝えしたいと思う。

さて、今年度の特別展「奥会津の冬」に、たくさんの方たちが訪れてくださることを願っています。奥会津の夏を巡り満喫しながら、この図録を手に、奥会津の冬を想像してください。そして、奥会津の冬を体験するための旅を、それぞれに計画してくださいることを願っています。

奥会津ミュージアム館長 赤坂憲雄

もくじ

企画展開催にあたって

只見川電源流域振興協議会会長 押部源二郎

“奥会津の冬”開催にあたり

奥会津ミュージアム館長 赤坂憲雄

まえがき

凡例

3 5 11 12

第1章 写真で見る奥会津の冬

冬のおそび 子どもの暮らし

息づく信仰 冬の年中行事

冬の暮らしと仕事

冬の食 保存の工夫

雪下ろしと雪踏み

豪雪と除雪

駒止峠の通送隊

14 20 46 58 68 76 84

第2章 奥会津の自然——雪がもたらす豊かな世界

世界に誇る雪食地形

豊かな自然を育む雪

水辺林が発達する奥会津

90 92 93

多雪がもたらす山の恵み

多雪地は生物多様性のホット・スポット

大型動物が生息する奥会津

奥会津の冬にみられる鳥類

トピック 雪をたのしむ

豪雪地帯と奥会津

第3章 奥会津の冬の暮らしを支えたもの

カンジキが支えた社会

聞き書きカンジキの社会史「サキコギ文化」

雪国の暮らし 現代の工夫

清一のカンジキづくり

書籍に見る奥会津の冬の暮らし

第4章 奥会津の冬に関する抜き書き

貞享二年（1685）南山御蔵入古町組風俗帳 伊南古町組——冬に関する記述抜粋

稿本『雪』

田島町史資料集No.11『福島県南会津郡田島町方言訛語集』——冬に関する言葉

著者紹介

奥会津マップ

謝辞



赤子をおぶって歩く女性(南会津町金井沢)

まえがき

奥会津の冬は豪雪と共にある。豪雪地帯対策特別措置法によれば奥会津の各町村は、「特別豪雪地帯」や「豪雪地帯」に指定されている。只見町蒲生では昭和十一年（1936）二月に積雪が五七〇cmに達した（『会津只見の自然』2001 只見町）。

この地にいつごろから大量の雪が降るようになったのだろうか。最終氷期が終わり約八〇〇〇年前の縄文時代早期頃、地球温暖化の進行に伴い海水面が上昇した。その影響で対馬海峡から暖流が日本海に流入するようになった。そこに寒冷なシベリア気団が襲来し大量の雪雲ができ、甚だしい量の雪が降るようになった。それ以前は、日本海はほぼ淡水で水位が低かったため、寒冷で乾燥した大陸性気候で雪はあまり降らなかったようである（安田喜憲『気候と文明の盛衰』1990）。

奥会津の縄文時代早期以降の遺跡は、只見川、伊南川^{いながわ}、阿賀川^{あがわ}等の兩岸の河岸段丘に多く所在している。これは日本海から遡上するマスやサケを獲るのに便利であったためと考えられる。現在の奥会津の集落も各河川に沿うように所在している。

昭和三年（1928）阿賀野川を流れる新潟県東蒲原郡阿賀町鹿瀬^{かのせ}にダムが建設されると海域と陸域が遮断され、マスやサケを獲る文化や、奥会津の木材を筏に組み新潟港まで流送する文化は消滅した。

縄文時代の温暖化に伴って植生も劇的に変化した。それまでのスギ、ネズコ、チョウセンゴヨウ等のような針葉樹林から、ブナ、トチ、ホオノキ、サワグルミ、ミズナラ等の落葉広葉樹林に変わった。人々はトチやナラ類の実を食料とし、サワグルミの樹皮で箕^みを作り、ブナは会津漆器の木地になった。奥会津に生きる人々は、このような自然環境の基で営々と豊かな文化を築いて来た。

本書では、奥会津の人々が、どのように豪雪と向き合い冬を暮らしてきたのかについて深掘りしていく。構成は4章とした。第1章は、主に昭和三十年代から平成時代までの冬にまつわる写真を掲載した。特に駒止峠^{くまど}の通送^{とんそう}についてページをさいた。第2章は、只見町の冬の自然環境について紹介する。奥会津随一の積雪がある只見町についての記述が中心となる。第3章は、奥会津の冬の暮らしを支えたもの」と題しカンジキに焦点を当てている。第4章では、雪や冬に関する江戸期、大正期、昭和期の文献を三点紹介する。（渡部康人）

凡 例

(敬称略)

- 本書は令和6年(2024)7月20日から奥会津7町村文化施設において開催する連携企画展「奥会津の冬」に関連する報告書である。
- ここでいう奥会津とは、檜枝岐村・只見町・南会津町・柳津町・三島町・金山町・昭和村の7町村のことを指す。
- 本展における会場と会期は以下のとおりである(以下、市町村コード順)。
 - [檜枝岐村] 尾瀬写真美術館
会期: 7月20日㊥から11月4日㊦㊧まで
 - [只見町] ただみ・モノとくらしのミュージアム
会期: 7月20日㊥から11月10日㊨まで
 - [南会津町] 奥会津博物館
会期: 7月20日㊥から11月24日㊨まで
 - [柳津町] やないづ町立斎藤清美術館
会期: 7月20日㊥から11月10日㊨まで
 - [三島町] 三島町交流センター山びこ
会期: 7月20日㊥から9月29日㊨まで
 - [金山町] 東北電力奥会津水力館「みお里」
会期: 7月20日㊥から9月29日㊨まで
 - [昭和村] からむし工芸博物館
会期: 7月20日㊥から11月10日㊨まで
- 本書の原稿執筆は、以下の者が行った。

第1章 写真で見る奥会津の冬	渡部康人(奥会津博物館文化財専門員)
第2章 奥会津の自然一雪がもたらす豊かな世界	新国 勇(只見町文化財調査委員会議長)
第3章 奥会津の冬の暮らしを支えたもの	菅家博昭(元昭和村文化財保護審議会委員長)
第4章 奥会津の冬に関する抜き書き	渡部康人(奥会津博物館文化財専門員)
- 本書、第1章に掲載した写真は、主に各町村より提供していただいたものを利用しており、その一部を小林宗一(南会津町)が複写し、利用したものである。撮影年のわかるものには適宜記載した。第2章、第3章の写真は著者の撮影によるものである。

組織体制

会 長 押部源二郎(金山町長)
事務局 長 齋藤理史(昭和村派遣)
事務局 次長 渡部雅広(福島県派遣)
主任事務局員 鈴木 徹(只見町派遣)
主任事務局員 栗田一路(柳津町派遣)
主任事務局員 志田雅史(三島町派遣)
主任事務局員 金成隆寛(金山町派遣)
事務局員 山内美代子

事務局

只見川電源領域振興協議会
(奥会津振興センター内)
〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川
字上居平933
電話 0241-42-7125
FAX 0241-42-7127
E-mail: tdrsk@okuaizu.net
URL: <https://okuaizu.net>

※本書は「電源立地地域対策交付金」により作成されています。

